

車僧

世阿弥作

前

ワキ 車僧

シテ 山伏

後

ワキ 前に同じ

シテ 太郎坊

地は 山城

季は 冬

ワキ次第

「後の世かけて車僧。く。常寐の眠りいつまで。

歌

「降り曇る。空は小倉の嶺の雪。く。散るや嵯峨

野の嵐山。滝の響も声添へて。重なる雲の大井川。

筏の床の浮枕。片敷く袖も白妙の。空も程なく廻

る日の。西山本に着きにけり。く。

詞

「暫く此所に車を立て。四方の気色を詠めうずるに
て候。

シテ詞

「如何に車僧。

ワキ詞

「何事ぞ。

シテ

「浮世をば。

ワキ

「浮世をば。

シテ

「浮世をば。何とか廻る車僧。まだ輪の内に在りと

こそ見れ。

ワキ

「浮世をば廻らぬ物を車僧。

詞

「乗りも得るべき我あらばこそ。

シテ

「乗りも得るべきわがあらばこそと云ふは誰ぞ。

ワキ 「空堂風涼し。

シテ 「我名のみ高雄の山に言ひ立つる。

ワキ 「人は愛宕の嶺に住むな。

シテ 「さて御僧の住家は。

ワキ 「一所不住。

シテ 「車は如何に。

ワキ 「火宅の出車。

シテ 「廻れど。

ワキ 「廻らず。

シテ 「押せど。

ワキ 「押されず。

シテ 「引くも。

ワキ 「引かれぬ。

シテ 「車僧の。

地 「三界無安猶如火宅をば。出でたる三つの車僧かな。

廻るも直なる道なりけり。あふ乗り得たり乗り得

たり。

地

「見聞く人。心空なる雲水の。く。深立つ空も

冷ましく。嵐も声々に愛宕山。嶺とよむまで響き

合ひて。車路は無けれども。我住む方は愛宕山。

太郎坊が庵室に。御入りあれや車僧と。呼ばゝり

て夕山の。黒雲に乗りて上りけり。く。(中入)

後シテ一声

「愛宕山。檜が原に雪積り。花摘む人の跡だにもなし。

詞

「実に雪中に山路なし。さて車輪は如何に車僧。我

程貴き者あらじと。慢心の心路跡なからんや。然

らば無着法欲心に。引くか移るか車僧。魔道にも

心を寄せよ車僧。

地

「善悪二つは両輪の如し。

シテ

「仏法あれば世法あり。

地

「煩惱あれば菩提あり。

シテ

「仏あれば衆生もあり。

地 「車僧あれば。

シテ 「太郎坊の行者も有り。

地 「祈らば祈るべし。行ぜば行徳も。劣るまじとよ
く。いざ車僧行くらべせん。

ワキ詞 「如何に汝妨ぐるとも。それには寄らじ争はじ。我
はもとより不増不減。あらおもしろの時節やな。

シテ詞 「実におもしろき時節ならば。雪中に車を廻らし。
嵯峨野の原にいざ遊ばん。

ワキ 「遊ばゝ遊べ糸ゆふの。我心をば引かれめや。

シテ 「などかは引かで有るべきと。標を振り上げ車を打
つ。

ワキ 「あふ車を打たば行くべきか。牛を打たば行くべし
や。

シテ 「実にく車は心なし。さて牛を打たんも有らばこ
そ。

ワキ 「愚や汝人牛の道。見えたる牛をばなど打たぬ。

シテ「見えたる牛とはさて如何にそも人牛は。

ワキ「打つとも行かじ。

シテ「さて御僧の打たば行くべきか。

ワキ「中々の事。いでくさらば露地の白牛を打つて見せんと。払子を上げて虚空を打てば。

地「不思議やな此車の。く。ゆるぎ廻りて今までは。足弱車と見えつるが。牛も無く人も引かぬに。易々と遣りかけて。飛ぶ車とぞなりたりける。

ロンギ地「小車の。山の蔭野の道すがら。法の道の辺遊行して。貴賤の利益なすとかや。

シテ「所から。こゝは浮世の嵯峨なれや。雪の古道跡ふかき。車のわだちは足引の。大雪にはよも行かじ。

地「実に雪山の道なりと。法の車路平らかに。

シテ「行くか行かぬか此原の。

地「草の小車雨添へて。

シテ「打てども行かず。

地 「とむれば進む。

シテ 「此車の。

地 「法の力とて。 嵯峨小倉大井嵐の。 山河を飛び翔つて。 眩惑すれども騒がばこそ。 誠に奇特の車僧かな。 あら貴や恐ろしやと。 魔障を和らげ大天狗は。 合掌してこそ失せにけれ。